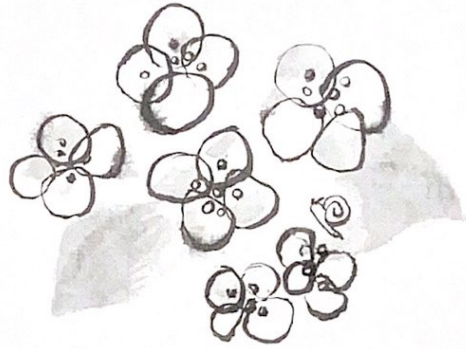


母塾

2019・6・25

VOI-21



新小岩幼稚園・未就園児クラス

illustrated by kurumi

『 手をつなぐ間のこと 』

アドバイザー 猪之鼻晴子

今春、三男の小学校の卒業式のフィナーレ。桜咲く校庭で在校生が花道を作る。「お父さん、お母さん、子どもと手をつないで花道を通ってください。」先生のアナウンス。「もうなかなか手をつなぐことなんてありませんよ。」そう続く。私とほぼ同じ背丈になった三男と手をつないでみた。いつ以来だろう。前の列には「やめてよ。」とママのお手を振りほどいている男の子もいる。拍手の中、校庭の端までの距離。ほんの3分間のことだった。ふっと手を離して、もう一度軽く握ってみた。もうなかなかこの子と手をつなぐチャンスはないだろう。

4才の6番目、四男のお迎えの緑の小道。どの子も自然に手を伸ばしている。どのママも子どもと手をつないで歩いている。「今日ね。」ママに報告があるのだ。

23・21・18・15・13才の5人の子どもたちと手をつながなくなってどれくらい経つのか身体に触ることもめったにない。私の身体を触ってくることもない。時々「背を測ってあげるね。」と頭を押さえて柱に付けてみるのがせいぜいだ。大きくなった子どもが手を伸ばすのは「お弁当出来た？」と「おこづかいの日だよね。」の時くらいだ。私が手を伸ばすのは「テスト見せなさいよ。」の時。

子どもと手をつないで歩くのは、ほんのひと時なのだ。子育ては全部過ぎてしまってから気づく。どれほど短い時間だったのかと。

「早く、早く。待ち合わせに遅れちゃうよ。」と急かしても、4才は小さな歩幅で歩く。「ママ、今ダンゴムシいたよ。」と今来た道に戻られる。「雨が降って来るから早く帰ろう。」と言ってもジグザグに歩く。「あの道、看板に怖い絵が描いてあるよ。」と遠回りさせられる。

いつか、それも割とすぐに手をつないでくれなくなるのだ。急ぐこともない。ゆっくり歩いてみようか。見たい見たいと言っていた公園のカモのところに寄ってみよう。小さな手を少し強く握ってみる。「ねえ、ママとずっと手をつなごうね。」「やあだ。滑り台してくる。」と走って行ってしまふ。

harukoinohana1717@gmail.com